第７回　白梅子ども学講座

「発達障害の再考」

子ども学科　市川奈緒子

報告

１．企画意図

近年，一般書やテレビなどでも「発達障害」のことばが当たり前のように使われるようになってきている。発達障害者支援法の施行と特別支援教育の実施もあって，世の中にはそういった障害が存在することが広く知られるようになってきたのである。しかし，広く知られるようになってきたということはそれについてさまざまな言説がさまざまな角度からされるようにもなってきたということである。しかも「広く知られるようになった」イコール「正しく理解されるようになった」ということでも残念ながらないと言わざるを得ない。「発達障害」に対するさまざまな向き合い方のうち，「早期に発見して」「早期に訓練する」ことがよいとされる風潮は根強いが，それは誰にとって「よい」ことなのか，を再度検証する必要性がある。つまり，広く知られるようになったことが「発達障害」を持つと言われるひとたちのために開かれた，生きやすい社会を作っているのだろうかということを再考しなければならないように思われる。

こうした問題意識のもとで，本講座は，「発達障害」へのさまざまな支援法・指導法を唱える多くの他の講座とは一線を画するものとして企画された。また，各回にふたりの講師が登壇したが，研究者と実践家など，背景や経験や視点の異なるふたりの講師の話と対談から，また豊かなものが生まれることが期待された。

２．各回の報告

第１回　２０１３年９月２８日（土）
　　１３時半～１６時半
「発達障害の再考１
　～発達障害児である前に
　　ひとりの子どもである～」
田中康雄
　こころとそだちのクリニックむすびめ　院長
井桁容子
　東京家政大学ナースリールーム主任
　東京家政大学短期大学部非常勤講師

田中先生からは，「発達障害とは何か，われわれは支援者としてどのように向き合えばよいのか」という点について徹底的に模索した結果，医師として，そして応援者として「生活の障害」として向き合うことを選ぶようになった経緯が語られた。井桁先生は，ナースリーで出会った子どもたち，保護者たち，そして大きくなった卒園生たちの姿から，発達障害を持つと言われる子どもたちの持つ力と，彼らを取り巻く社会の在り方を検証しつつ，子どもたちの仲間関係が豊かに作られていく過程を，これからの社会への希望として語られた。

第２回　２０１３年１０月２６日（土）
　　１３時半～１６時半
「発達障害の再考２
　～療育訓練の前に子育てがある～」
尾崎ミオ
　編集ライター
　NPO 法人東京都自閉症協会副理事長

一般社団法人 Get in touch 理事
山本芳子
豊島区子ども家庭部子育て支援課子どもの
権利担当係長

尾崎先生は当事者の立場から，「発達障害」を診断名や類型化で理解し対応しようとする在り方に警鐘を鳴らし，「発達障害」と向き合うのではなく，その人自身と向き合いながら，その人らしい生き方を応援すべきことを語られた。山本先生からは，保育者の立場で長年子育て支援をしてこられた体験から，発達障害を持つ持たないに関わらない，ゆるぎない支援者の姿勢とその専門性についてお話をいただいた。

第３回　２０１３年１２月２１日（土）
１３時半～１６時半
「発達障害の再考３
～特別支援教育と
『普通の』教育は何が違うのか～」
阿部利彦
星槎大学共生科学部准教授
吉本裕子
帝京大学教職大学院教職研究科客員准教授

阿部先生には，多くの学校で実践や相談者として関わられたご経験から，児童生徒の各特性を丁寧に理解しながら授業のユニバーサルデザインを作り上げていくためのキーワードについて掘り下げてお話いただいた。吉本先生には，長年の校長としてのご経験から，学校全体として授業改善をおこなうなど，特別支援教育の取り組みの中で教員自身が成長する様子とその手立てについてお話いただいた。

第４回　２０１４年２月８日（土）
１３時半～１６時半
「発達障害の再考４
～『発達障害流行り』の背景にあるもの～」
汐見稔幸
白梅学園大学・白梅学園短期大学学長
品川裕香
教育ジャーナリスト
元内閣教育再生会議委員
前中央教育審議会専門委員

汐見先生からは,「発達」「能力」「障害」といった概念の捉えなおしとその相対的な意味づけが提起され，医学とは異なる保育・教育学の価値体系の重要性とそれに基づくこれからの社会の在り方について話された。品川先生には，おもに青年期・成人期の発達障害をもつひとたちの支援実践から，そうした特性を持ったひとたちにとっての社会適応とそれに向けての教育の本質的な意義について，犯罪学の視点も取り入れながらお話しいただいた。

３．各回の講座を俯瞰して

今回の講座は，「発達障害」というキーワードを中心にしながら，発達的な特性を持つ個人が現代社会の中でどのように苦しんでいるのか，それはなぜなのかをさまざまな観点から読み解きながら，それに対してわれわれは何ができるのかを検証し，共有しようとしたものである。それは「支援」という枠組みにとどまらず，この社会全体をわれわれはどう形作っていくのかという問いかけでもった。８人の講師の背景となる実践も学問体系も異なるものではあったけれども，驚くほど共通していたのは，ひとりひとりの目の前のひとを大切にし，そこから学ぶ姿と，つねに「…では自分はどうすればよいのか」を深く考えることから前に進んでいくという当事者性である。各講師が自らのそうした姿勢を示しながら，参加者にも呼び掛けていたように感じた講座であった。